

日本の食生活と農業政策

江 幡 仲 衛

1. 世界の食糧作物生産と食生活

世界各民族の食生活を概観すれば、その民族の住んでいる地域で生産される食糧を主食として、生活していることが判明する。即ち次の様なものである。

(1) アジア地方

朝鮮，満州北部	あわ
インド，アフリカ	きび
満州南部，中国北部	こうりゃん
日本，中国中部，南部， インド低地，東南アジア	米
アジアの西部	きび
コーカサス	小麦（煎餅パン）
シベリヤ，ソ連	
チェコスロバキヤ	黒麦（黒パン）

(2) 欧米その他

北米，カナダ，オーストラリア， 南米	小麦（白パン）
中南米	トモロコシ
南米アンデス地方，ドイツ	ばれいしょ
南米，東南アジア土人	タピオカ
ニューギニア	甘しょ
中米土人	バナナ
アフリカ	でん粉バナナ
仏印	でん粉に富んだサガ椰子
南太平洋土人	タロ芋

(3) 米の生産量の多い国をあげると次の通りである。

第1位	中国
第2位	インド
第3位	日本
第4位	パキスタン
第5位	インドネシア

第6位 タイ

第7位 ビルマ

第8位 ブラジル

2. 日本の米作と食生活

我国は夏季高温多湿で稲作に適し、開闢以来先祖が稲作に努力して来たので、稲作中心の年中行事が多く、五穀豊穡を祈る祈年祭を初め、御田植祭、雨乞祭、豊年祭等限りがない。そして米は日本人の大切な主食であった。古代、中世代においては玄米を蒸して食べた。此の蒸米をコワメシ（饅）と称し武士の出陣に携帯した。そのため昔の人は体格が勝れ大きかった。然るに元禄時代に至り人々が贅沢となり搗米して白米にして食べる様になり、日本人の体格は段々と低下し病人も多くなった。殊に日清戦争後には米の不足により東南アジアより南京米と称して輸入した。此の米はインド種で、粘りなく粳より直接精白したため精白の度が高く、ビタミンB₁B₂が皆無となり、之を食べた工場の女工や、学校の寄宿舎生に脚気患者が多発した。これを研究した鈴木梅太郎博士は米糠よりオリザニンを抽出し、ビタミンBの研究の先駆をなした。

3. 第2次大戦と食生活

第2次大戦中は益々米の不足を来し、米に雑穀の外、甘しょ、ばれいしょ、南瓜等を混入して主食とした。そして昭和17年2月に食糧管理法なる法律を制定し、米の外麦類、芋類を統制して政府に供出せしめて軍事優先にし、残りを国民に配給した。此の法律は戦争遂行目的のための食糧確保であった。

然るに終戦直後の食糧不足は甚だしく、一般

国民の困窮は悲惨なものであった。

4. 終戦後の食生活

戦後の食糧不足にあたり、学童救済のためと称してアメリカは有る小麦を供給してパン屋に製パンさせ学校給食を開始した。パンはコッペパン不味で余り良くなく。副食の力で食べた。学童はパンに馴れて米の飯よりパンを好む様になり、副食の栄養により体位が向上した。此の学童が成人して国民の多数を占める様になった。

一方米の生産者である田小作人は、農地改革により自作農となった。

汗水流して作った米の半分は小作米として地主に取立てられたのだが、全部自分のものとなったので、農民の稲作意欲はいやが上にも上り、食管法は農民の生産米を政府が全部買上げねばならぬ責任がある。

高度経済成長の浪に乗り、労働者の賃銀上昇に便乗して米価の釣り上げ運動をなして、米の価格が高騰、それにビニールの出現で稲の早期栽培、農薬の発達により病虫害の防除等益々米の増産に拍車をかけた。

工業の発展と共に水田は工場敷地や住宅団地等に埋立てられるに拘らず、山地、原野の開墾、水面の干拓により水田の造成が行われた。食管法は生産者の所得補償をする様に変った。一方誤った栄養学の普及のためパン食が増え米食は肥満体となると感違いし、若い者の米離れとなった。

それに昭和42年より天候に恵ぐまれ4年連続

の豊作となった。

米の買上げに食管赤字は増える一方で在庫米は700万トンにも達した。

5. 農業政策

昭和46年より米の生産調整として、水田10%の減反政策を実施した。そして全国至る処の水田が豊葦原の荒田になった。

減反政策は4年連続したが効き目がなく、更に53年度にも40万haの減反で170万トンの減収政策を実施せんとしている。これが第2次減反政策である。

食管法制定の目的は食糧の確保であったが、今日では生産者の収入補償になった。

米の消費が少ないのに生産量が増し、食管会計の赤字となり、所謂場当り農政だと称せられるのである。

農業政策は遠い将来を見通して方策を立てねばならぬ。

世界の人口は益々増加し1985年代には50億人にならんとしているのに食糧は益々不足する傾向にある。

我が日本においては国土が狭少となり、その上200海里問題のため、漁業海域が規制せられ、動物性タン白質の減少を来たさんとしている。

米が余ったからと言っても食糧が余っているのではない、農林省の統計を見てもその自給率は合計で70%、小麦、大豆に至っては僅か4%或は3%に過ぎない。次表の通りである。

日本の食糧自給率

	昭和 35 年度	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	含 沖繩 47	含 沖繩 48	含 沖繩 49
1. 穀物	83	75	73	63	63	61	59	63	62	56	48	42	43	42	41	40
(1) 米	102	95	98	95	94	95	101	115	118	117	106	92	100	100	101	102
(2) 小麦	39	43	38	17	28	28	21	20	20	14	9	8	5	5	4	4
(3) 大麦	104	89	85	60	58	57	56	50	46	38	28	23	15	14	3	4
(4) 裸麦	112	89	90	28	119	123	90	92	115	98	73	73	64	64	10	11
(大裸麦計)	107	89	87	51	70	73	65	59	60	48	34	29	18	18	10	11
(5) 雑穀	21	15	11	9	6	5	3	3	2	2	1	1	1	1	1	1
2. いも類	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
3. でん粉	93	91	87	105	96	96	94	101	102	95	97	94	94	94	94	94
4. 豆類	44	42	35	31	23	25	19	20	17	14	13	11	16	12	12	12
(1) だいず	28	25	21	17	13	11	9	8	7	5	4	4	4	4	4	3
(2) その他の豆類	90	90	76	74	58	69	56	69	60	65	63	48	65	65	65	65
5. 野菜	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	99	99	99	99	98	98
6. 果実	100	98	97	92	90	90	89	89	88	85	84	81	82	82	83	83
7. 肉類	93	95	95	90	92	92	91	86	84	84	89	83	81	81	78	81
(1) 牛	96	96	97	98	97	95	92	88	90	91	89	82	80	79	79	79
(2) 豚	96	100	100	97	99	100	106	96	95	94	98	96	90	90	90	90
(3) にわとり	100	100	100	97	98	97	97	97	95	95	98	95	96	96	96	96
8. 鶏卵	101	101	101	101	100	100	100	99	98	98	97	98	98	98	98	98
9. 牛乳、乳製品	89	89	89	89	85	86	80	82	88	91	89	88	87	86	83	83
10. 魚貝類	110	109	111	100	112	109	110	108	108	107	108	106	106	106	106	106
11. 海藻類	92	89	93	86	89	88	83	87	89	88	91	90	88	88	88	88
12. 粗糖	0	1	2	4	4	5	6	5	4	4	3	3	3	9	20	15
13. 油脂類	85	90	93	88	84	83	76	78	77	75	82	83	34	86	86	86
(1) 植物油脂	101	98	97	99	99	98	99	99	98	96	99	101	99	96	98	98
(2) 動物油脂	60	75	83	66	55	55	33	35	34	34	46	46	50	50	50	50

石油ショック以前の経済成長の時代は、工業に重点をおいて、外国の安い農産物は輸入する方針であったのが、此の統計である。大豆の如きは日本古来の作物で、植物性タン白質源として味噌、醤油、豆腐、納豆等の原料に大切な資源である。終戦前は満州より移入したが、現在はその80%をアメリカに頼っている。50年8月に安倍農相が渡米して、アメリカのバツ農務長官をお願いして大豆、小麦を恒久的に供給し

て呉れる様、頭を下げています。大豆は3%。小麦は戦前自給していたのに今は4%である。パン食が盛んになったためである。

パンが米に比し特別栄養があるわけではない。それ程パンが食べたければ米でパンを製造すればよい。大正8、9年頃玄米パンが流行したことがある。玄米を粉にし小麦粉と混じ、日本酒の酒母で膨張させたので、酒の香りがして美味しく食べたことがある。

最近精白度の高い米を「水晶米」と印刷したビニール袋に10Kgずつ詰めて販売している。近頃脚気患者が多くなったと言はれる所以である。

白米ということは粕ということで、粕を人間が食ひ、健康の康である糠を家畜に食はしているのが現状である。次の表に従っても明白である。

成分 搗精度	容量	タン白質	脂質	糖質	センキ	灰分	ビタミ ン		
							B ₁	B ₂	ニコチン酸
玄米	100	7.4	0.3	72.5	1.0	1.3	0.36	0.10	4.5
五分搗	99.5	6.3	1.5	74.5	0.6	1.0	0.25	0.07	3.5
七分搗	94	6.6	1.1	75.6	0.4	0.8	0.21	0.05	2.4
白米	91	6.2	0.8	76.6	0.3	0.6	0.09	0.03	1.4

6. 結 論

農業政策の中心は食糧政策である。食糧問題は一国の存立に関係する。

農業政策は農業者のためのみでなく、国民全体の生活にかかわる問題である。

農林省は厚生省と歩調を合はせ国民の生活、健康を考慮して行政に表はすことである。

米は胚芽米とか、七分搗として配給し、学校給食、家庭に使用させる。

稲の刈取後の水田は殆んど裏作をせず遊んでいる。之に麦作をする義務づけをするか、或は出稼ぎ農家の多い東北地方の労力を暖地の水田裏作の麦作に差向ける。

従来都会に出て馴れない土建作業に従事し思はぬ事故のため生命を犠牲にする人が少くない。此れを麦作なれば事故がないと思う。

此れは農協同志が中介をなして集団作業で実施することが出来ると思う。

大豆は農家のみでなく国民全体に豆播き運動を起し、空闲地を利用して必ず大豆の栽培をさせる。大豆は除草さいすれば肥料などなくとも生育する。金もうけのため土地を購入して値上

りを待つため放置してある土地が多い、必ず大豆を播く義務を負はすことにするがよい。そして大豆の品種はその気候風土に合った品種を選び、栽培法なども研究の余地がある。移植をするとか、摘心をして3本仕立にすれば収量が多いので指導することである。

我国の畜産はその技術が向上し、畜産物は殆んど自給に近いが、その飼料はすべて輸入に頼っている。出来るだけ自給の方策を講ぜねばならぬ。山地、空地の利用をなしニュージーランドならずとも草地農業の徹底を期さねばならぬ。

文 献

石田竜次郎	資源経済地理食糧部問	1941
森末 義彰	食 物 史	1962
下田 吉人	日本人の食生活史	1966
食生活研究会	これからの食生活	1976
樋口 清之	日本食物史	1960
稲垣 長典	食 品 学	
農文協論説委員会	現代農業	1978
農林統計協会	食糧需給表	1974
FAO Clrs Hy Life		1978
和歌森太郎	たべものの歴史	1958